

三十五年ぶりの広島再訪

島村輝

三・一一東日本大震災と、それに続く東京電力福島第一原子力発電所の事故のあと、以前から企画のあった林京子さんへのインタビューを実現することができ、岩波書店からブックレット『被爆を生きて 作品と生涯を語る』として刊行されたのが、二〇一一年七月のことだった。林さんとは、地元の「九条の会」などの活動を通じて、それまでもいろいろのお話をうかがう機会があったのだが、たまたまインタビューの時期が、原発の事故発生後となったこともあり、上海での少女時代から、長崎での被爆体験、作家としての出発、その後の長い時間のなかで出会ったこと、考えたことなど、林さんの半生にわたる、さまざまな方面についてうかがうことができ、インタビューアーとして、本当に幸いだったと思う。そんなことで、あらためて原爆文学との縁も深まった。

二〇一二年の四月に三年生になり、新たにぼくのゼミに加わった学生たちには、このブックレットの中身なども紹介していたのだが、恒例となっているゼミの旅行の行き先をどこにするか決めることになったとき、長崎、広島という声が、学生のほうから出てきたのには、正直なところいささか驚いた。三・一一を体験した学生たちにとって、放射能被害が非常に切実な関心事であった

ことに、改めて気付かされた。ゼミ旅行としては、長崎はいささか遠方に過ぎるので、行き先は被爆の原点としての広島とし、事前学習として『黒い雨』『夕風の街 桜の国』『父と暮せば』の映画を見るなどして、原爆投下の日直前の八月一日、二日の日程で、広島を訪れることになった。

ぼく自身についていえば、広島のを訪れるのは、今回が二度目である。最初は一九七七年、その頃はまさに今回引率をしていく学生たちと同じ年頃の、大学二年生であり、分裂していた原水爆禁止世界大会が、十数年ぶりに統一して開催されるというなかで、その大会に参加するのが目的だった。代表団として、東京からバスを仕立て、丸一日かけて広島に着いたのだが、記念すべき統一大会といいながら、現実には分裂して活動してきたそれぞれの団体の勢力争いが表に立って、出発前の高揚した気分が大分裏切られた思いで帰京した記憶があった。その後は大会も再び分裂し、ぼく自身も広島を訪れる機会を欠いていたのだった。

今回三十五年ぶりで学生とともに広島に行くことになり、この間すっかりご無沙汰していた当地の案内を自分でするのは手に余ると考え、信頼する友人に先達をお願いすることにした。お一人は広島県労働者学習協議会で事務局長を務められた二見伸吾さん、もうお一人は広島大学の川口隆行さんである。

二見さんは初日からホテルで一行を出迎えてくださり、広島市中心部のさまざまな記念施設などを、手際良く、わかりやすく紹介してくださった。学生たちの希望でかねてお願いしていたお好み焼屋での夕食の際には、ミニ・コンサートもあり、ぼくも協演させてもらって、楽しいひと時を過ごした。翌日は、広島大学の



院生のみなさんを引き連れた川口さんの案内で、沢山の慰霊碑、文学碑が林立する三滝寺、原民喜の生家、墓所、大田洋子被爆地などを巡った。

二見さんも御一

緒くださり、最高のガイドを得て、ゼミ旅行は、炎天の中、短い時間とはいえ、非常に充実した旅程となった。

本当に久しぶりに訪れた八月の広島は、さすがに学生のころの印象とはかなり違ったところもあった。何よりの違いは、その地を踏む自分自身の、原爆や放射能被曝についての知識、とらえ方

が、二十歳前の頃とはまったく異なったものとなっているということだろう。ある意味で純粋な、逆にいえばあまりに素朴に過ぎる考えをもって触れることになった初めての広島経験からすれば、その後さまざまな事実を知り、それなりに年月を積み重ねてきた中で、学生を連れて再訪した広島の意味は、かつてのように単純なものではあり得なくなっている。その意味で、学生たちにとってこの旅行が深く印象に残るものであっただろうと同様に、ぼく自身にとっても、今後の研究・教育と、さらにいえば人生のスタンスをどういった点に置くかといった点にも、少なからぬ影響を蒙ったかと思う。

その後、これもご縁あって「原爆文学研究会」に入会させていただくことになった。遅ればせの新入会員として、三十五年ぶりの広島再訪と、そこでの出会い、体験を、今後の原爆文学との関わりに活かしていきたいと考えている。